

I 魚類種苗生産技術開発事業

3 アイゴ種苗生産試験*

狭間 弘 学

目 的

本事業は地域沿岸漁業が重要とする最も一般的な地方性魚種を対象とした種苗生産技術の確立と漁業者の自主的な栽培漁業が成り立つようその支援を目指している。そこで、前年度¹⁾に引き続きアイゴの種苗生産技術を開発する。

親 魚 と 採 卵

親魚は1995年度に入手した成魚30尾を4 m³FRP円形水槽に収容し、オキアミ（ハマチエードAを外割で2%添加）、マダイ用配合飼料（丸紅飼料k.k.）、アオサ、カジメなどを土曜日を除き1日3~4回飽食量与えて養成した。産卵が始まる2ヵ月前の4月下旬からは成熟促進の目的で魚体重1kgに対し人体用ユベラ30mgをオキアミに添加して給餌した。飼育水は砂濾過海水を使用し、換水率は24回/日とした。

養成結果を表1に示す。親魚の成長は約10ヵ月で平均215gの増量を示した。この間の減耗は'95年8月に田辺湾で釣獲したものがハンドリング時のスレで体表と周口部が赤くびらんして斃死したのみで、その後は冬季の低水温の影響による斃死も認められず、全期間を通じ養成は比較的容易であった。

親魚は'96年6月下旬頃から腹部が膨らみ始め、

7月8日の測定では精液を漏らす個体が認められた。採卵はこの中から腹部の膨らんだ9尾と精液を漏らす個体6尾を1 m³FRP水槽に移し、水温を27℃に加温調整して産卵を促した。7月22日、23日の2回、朝9時頃から水槽内が白濁して自然産卵が行われ、卵は換水後、親魚を取り除いて後回収し、22日は509.1g（280万粒）、23日は110.5g（60.8万粒）を得た。取り揚げた卵は100ℓFRP水槽に設置したゴース製ネット内に収容し、微流水で管理して孵化させた。受精卵は無色透明、沈性・粘着卵で、4~7個の大油球と数個の小油球を備え、大きさは平均卵径0.59mm（0.56~0.62mm）、1g当たりの卵数は約5,500個であった。受精卵は水温27℃では約27時間で孵化がはじまり、孵化仔魚の大きさは平均全長2.33mm（2.26~2.36mm）、孵化率はほぼ100%であった。

種 苗 生 産

種苗生産は22日産出、孵化した仔魚のうち10万尾を1 m³FRP水槽5面に収容して行った。飼育水は砂濾過海水を0.45μマイクロセラミックフィルターで濾過した後、紫外線で殺菌したものを使用し、飼育水中にはナノクロプシスを50×10⁴細胞/mlになるように適宜添加調整して、水質の安定を図った。通気は酸素発生器（シーバス リミテッド）と通

表1 アイゴ親魚養成結果

測定日	全 長 (cm)		体 重 (g)		尾 数
	平 均	範 囲	平 均	範 囲	
'95.8.30	33.9	30.7~36.5	508	410~605	32
'96.7.8	33.9	30.8~38.0	723	518~950	30

*魚類種苗生産技術開発事業費による。

常のプロアーで行い、1水槽にエアーストーン2個を用い、通気量はそれぞれ1.0ℓ/分とした。

仔魚は孵化後48時間で眼胞に色素沈着がみられ、卵黄と油球をほぼ吸収し終えて開口した。餌料は90μネットで濾して40μネットに残った小型のシオミズツボワムシを飼育水中に2個体/ml与えた。シオミズツボワムシの栄養強化はクロレラ濃縮液で一次培養したものを、給餌の12時間前にナノクロロプシス、油脂酵母、ドコサ・ユウグレナ、アクアランで二次培養した。仔魚は開口後12時間目から消化管内に1~3個のワムシが観察され、選別小型ワムシは初期餌料として有効であると考えられた。しかし、孵化後3日目の夕方から浮上斃死がみられ、翌朝には全滅した。斃死魚を顕微鏡で見ると、仔魚の体表や体内に多数の繊毛中のスクーティカが寄生してい

るのが観察され、斃死原因はこれによるものと思われる。本年度は産卵が7月22日、23日の2回のみであったことから、その後、種苗生産を行うことはできなかった。

以上、本年度は自然産卵したものから孵化仔魚を得たものの、寄生虫症によって孵化後4日目までの飼育にとどまった。また本種は産卵期間が短く、種苗生産を計画的に行うことが難しいことなどから、今後は人工採卵方法と寄生虫対策について検討してゆく必要がある。

文 献

- 1) 狭間弘学, 1996: アイゴ種苗生産試験, 本誌第28号, 6.